

定本
橫光利一全集

定本
横光利一全集
第一卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第一卷

昭和五十六年六月二十日 初版印刷
昭和五十六年六月三十日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 保昌正夫

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二一三一一二

電話 四〇四一一二〇一 (營業)

四〇四一八六一一 (編集)

振替口座 (東京) 〇一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

© 一九八一

目次

芋と指環	240
落された恩人	231
マルクスの審判	205
碑文	196
蠅	187
日輪	98
笑はれた子	91
南北	50
月夜	37
悲しめる顔	20
父	12
犯罪	8
神馬	3

敵

266

穴

281

村の活動

287

御身

303

赤い着物

328

馬に乗る馬

336

草の中

347

幸福の散布

353

舟

355

無禮な街

365

頭ならびに腹

396

セレナード

404

參考作品

姉弟

火

寶

杓子顏

解題
編集ノ
ト

保昌
正夫

487

475

466

456

448

定本
橫光利一全集
第一卷

神馬

豆臺の上へ延ばしてゐた彼の鼻頭へ、廂から流れた陽の光りが落ちてゐた。蠶が彼の鈍った茶色の眼の上へ垂れ下ると、彼は首をもたげて振つた。そして又食つた。

肋骨の下の皮が張つて來ると、瞼が重くなつて來て、知らず／＼に居眠つた、と不意に雨でも降つて來たやうな音がしたので、眼を開くと黄色な豆が一ぱい口元に散らばつてゐた。で彼は呉れた人をチラツと見たきり、鼻の孔まで動かして又食つた。いくら食つても、ウツラ／＼としてゐる中に腹の皮がげつそり縮つてゐた。彼は食ひ倦きると、此の小山の上から下を見下ろした。

淡紅の蓮華畑や、黄色な菜畑や、緑色の麥畑が幾段と續いてゐた。そのずつと向ふには、濃い藍色の海が際涯しなく擴つてゐて、その上を水色の空が恰も子守りでも命ぜられてゐるかのやうに柔く壓へてゐた。彼は豆臺を飛び越えて走りたくなつて來た。が又豆がバラ／＼と撒かれると何もかも忘れて了つた。一間程前で、朱の印を白い着物中にベタ／＼押した爺が、檜傘を猪首に

冠つて、彼を拜んでゐた。彼はその間ムシャ／＼頬張つてゐた。顔を揚げると、傍で小僧が指を食はへて、不思議さうに彼を見てゐた。

（何て小つばい野郎だらう。だが此奴は呉れやらん。）彼は眼を爺様にむけた。爺は拜み終へて子供の頭を壓へながら云つた。

「さあ、さあ、拜まつしやれ。そんなに見たら眼がつぶれるぞ。」

子供は壓へられてゐる頭の下から未だ彼をジロ／＼見てゐた。聽て彼らは去つた。

（阿奴ら變挺なことをしやがる。何をしやがつたんだらう？）

急に臀部が氣持ち惡くなつた。彼は下腹に力を容れた。そして尾をあげるとポト／＼と床が鳴つた。臉が下りかけた。と石段を上つて地べたの上を音もたてずに、すばらしい勢で走り過ぎた小さい影を見た。何かしら？　と思つて過ぎた方をよく見ると、高い空で鳶が氣持ちよささうに輪を描いてゐた。

（何だ、鳶か俺は又牛虱でも來やがつたのかしらと思つたら）そして彼は又眠らうとしたが、木の影から黄色な鯉が竿の尖端に食ひついて遊んでゐるのが眼につくと、それを瞞めてゐた。廣い道が烟の間を眞直に延びてゐた。首を振り乍ら歩いてゐる馬や、唄を歌つてゐる頬冠りした人間や、車等が澤山往つたり來たりしてゐた。

（出て歩きたいな）と思ふと、兩側の柱から垂らして口もとで結んだ繩を噛み切りたくなつて來た。と何日か二三度逃げ出た時、三四日の間一食もくれなかつた苦痛を思ひ出した。

（あんな目に合せやがる―）彼は首を振つた。風が吹いて來た。前の榊の枝がざわついた。下の

道に白い塵埃が舞ひ立つて人も車も馬も飲み込まれた。鯉は竿に縋り、ガランが激しく鳴った。塵埃が向ふの山の麓の方へ走り去ると又靜になつた。そして暗くなつた山の峰が直き明るく輝いた。蓮華畑の横で女の子らが寝轉びながら摘草をしてゐる。他の二三人は麥畑の中で隠れんぼをしてゐる。見つかるキツ／＼と云つた。お轉婆らしい。掘り返した畑で大分腰の曲つた男が肥料を撒いてゐる。白い煙を吐いた下り列車が山際をノロ／＼這つてゐる。石段の方から鈴の音が響いて來た。彼は急いで首をその方に向けた。赤銅色にギラ／＼光つた顔の男が長い杖をつき乍ら下りて來た。男の顔には鼻がなくて眞中に小さな孔が二つ開いてゐるだけである。

（妙な野郎、呉れるかしら？）が男は彼れを見るのは見たが、素通りした。

（あかん。おや！ 又來たぞ）下から駄目を叩きつけるやうなあわた／＼しい音がして來た。

（駄目駄目。奴は毎日通る奴だ。）

直ぐ下の方が又喧しくなつた。暫くすると五十人餘りの子供らが教師に連れられて上つて來た。彼の前で教師は子供らを些よつと止めて説明した。

「皆さん。この馬は、日露戦争に行つて、彈丸雨飛の間をくゞつて來た馬であります。馬でさへ國のため君のために盡して來たのでありますから、皆さんは猶一層勉強をして、國家のために盡さねばなりません。」

子供らは口をポツクリと開けてみな彼を見てゐた。誰も顔をほてらしてゐる。

（あいつらは何だらう俺をジロ／＼皆見やがる。だが呉れさうもない）そして彼は食ひ残した前の五六粒の豆を拾つた。子供らは又饒舌くりながら、塵埃を立てゝ石段を昇つて行つた。彼は食

ひ物がなくなると、何かそこらに落ちてゐないかと思つて、あたりを見廻した。が何もなかつた。眼の前の箱にもつた豆を食ひたいが口がとどかぬ。つと櫛の下に捨てゝあつた黄色な橙の皮に眼がついた。

（何だらう、あれや？）彼は色々考へてみたが遂々分らなかつた。然れ共食ひ物に違ひないとだけは思つた。そして妙に氣にかゝつてならなかつた。（食ひたいな）

その時遠くの方から馬の嘶聲が聞えた。彼は刺されたやうに首をあげて耳を立てた。

（おや！ あれや牝馬の聲だぞ。）もう橙のことを捨てたやうに忘れて了つて、猶じつと聞いてゐた。（牝馬だ。牝馬だ）迅速な勢でギューと何かしら背骨を傳つて下へ走つた。彼は前足を豆臺の上へ乗つかけて飛び出ようとした。兩側の繩がピンと張つて口をウンと云ふ程引いた。で彼は直ぐ足を落ろした。頭の中がガンと鳴つてゐた。狂ひ出しさうになつた。で後足に力を込めて、無茶苦茶に床板を蹴つた。社務所から男が來て彼を鎮めた。それでも未だ馬舎の中で立ち上つたりした。頭がはつきりした時には、牝馬の嘶聲が聞えなかつた。彼はその方にじつと向いてゐた。

淡藍の遠山がかすんでゐた。海には白帆が二三點見えた。暖い陽が總てのものゝ上に愉快げに見える。子供の喇叭を吹く音が聞えて來た。入道雲が動かない。

（何處で嘶いたのだらう。）

彼の前には綺麗な若い娘と白髪を後頭で刈り切つた老婆とが立つてゐた。老婆は財布から二錢玉を出して、机の上にのせて、一升の豆を豆臺に投げた。それから兩手で何かを頂くやうな眞似

をした。其處へ黒犬の大きいのが尾を振りながらやつて來て、立ち止つて彼を見た。少し首をかしげてゐる。

（ははア、此奴、豆を盜まうと思つてゐやがるんだな）彼はあわてて豆を食つた。老婆も娘も犬も彼の前から去つた。

驢て人通りが少くなつた。日が落ちた。淡闇が海を渡つてきた。白帆がもう見えぬ。星が廂の角で光つてゐる。濕つぱりした風が緩く吹いて來た。鳥が海から歸つて來る。畑にはもう人が見えぬ。奥から鐘がゴーンと鳴つて來た。いつもの男が彼の所へ、豆粕と藁とを混ぜた御馳走を槽に容れて持つて來た。彼は残らず平げた。そして男は重い戸をピツタリ落ろした。眞暗になつた。外で錠前の音がカチ／＼とした。今日も知らない一日を彼は生きた。

犯^つ 罪^み

私は寂しくなつて茫然と空でも見詰めてゐる時には、よく無意識に彼女の啼聲を口笛で眞似てゐた。すると下の鳥籠の中から彼女のふけり聲が楽しく聞えて来る。で、私もつい面白くなつてそれに應へたり誘つたりする。其中に面倒臭くなると彼女を放つたらかしておいた。が、彼女は猶も懸命にふけり續けた。凝乎とそれを聞いてゐると可哀相になつて来るので、又知らず／＼に相手になつてやつたりした。今も私は彼女を呼びかけた。が、もう彼女が居ないのだと氣附いて堪まらなく淋しくなつた。私は裏の山を凝乎と見た。

それは好く晴れた暖かい日であつた。私は前からゐた囃の目白を入れた籠と、新しい籠と、細い女竹に繒を塗つたのを二三本とを用意して山へ行つた。山には椿の花が澤山咲いてゐた。私は鬱然と茂つたある一本の椿の枝へ囃の籠を掛けて、上へ用意の女竹を交叉した。それからずつと離れた木蔭へ隠れて口笛を吹くと囃も切に彼方で眞似た。然れ共中々彼女はやつて来なかつた。

私は終ひには何もかも悉皆忘れて了つて、背負つてゐる弟の由を徑傍へ下して寢轉び乍ら棒の花を裂いては中の蜜を啜り始めた。由も食物と思つたのかして、私の捨てた啜りさがしの花を、口のあたりへにじり付けたので、低い鼻面を眞黄にさしてゐた。夕暮近くなつて全く思ひもかけなかつた時、突然目白の金切聲が聞えた。私は周章で走つて行つて見ると、未だ雛上りの若々しい彼女が、兩翅にベツトリ鱗を引付けて、熊笹の中でバタ／＼やつてゐた。私が彼女を拾い上げた時、彼女は切と悲しさうに啼き立てた。私は誇つてやる人がゐないので由の前へ出した。「鳥、鳥」と弟は嬉しさうに手を振つたかと思ふとギユツと彼女の首を握つた。私は急いで奪ひ返して見ると、死んでゐなかつたので、柔かく由の頭を張つた。「阿呆やなお前は」

彼女はそれから數日と云ふもの、私の心盡しの摺餌を餘り口にしなかつた。それ所か傍へ寄つても激しく鳴いて、狭い籠の中を縦横に飛び廻つた。が、二月程経つた頃にはもう私に馴れて了つて、手をさし入れても靜かにしてゐた。彼女は那一夏を古い囹から唄を習ふのに暮した。

二年程経つた。そして彼女も私も由も皆共に老いた。此夏になつて私が都から歸つて見ると、古い方の籠が空虚の儘物置の隅に置かれてあつた。酷く蜘蛛の巣がかかつてゐた。そして家の中には、めつきり老練さを増した彼女の謠ひ聲と、私の一番末の弟となつて何處からか出て來た新しい人間の泣き聲とが賑つてゐた。私は時々、末の弟が泣き出すと、彼女を棚から下して彼の眼の前へさし出した。「バーア、廣ちやんこれ何かに」すると廣は泣き止んで、額を籠の格子にピツタリ付けた。彼女は落ち付いて止木の上をアチコチに飛んだ。が、廣の眼を運ぶより早いのので、彼は反對の方許りを見た。其處へ由がやつて來ると、廣の頭をポンポン叩いて云つた。「廣